

さきがける 科学人

vol.106



Profile

神奈川県出身。2011年東京工業大学大学院情報理工学
研究科修士課程修了。東芝研究開発センター研究員、
ミュンヘン工科大学研究員を経て、16年博士(Dr. rer.
nat.)取得(ミュンヘン工科大学)。慶應義塾大学理工学
部特任助教、東京工業大学情報理工学大学院助教を経て、21
年より現職。17年よりさきがけ研究者。21年より創発
研究者。

Itoh Yuta
伊藤 勇太

東京大学大学院 情報学環 特任准教授
東京工業大学 情報理工学 特定准教授 /
理化学研究所 革新知能統合研究センター
高次元モデリングユニット 客員研究員

人とのつながりが
チャンスをつくる

Q1. 研究者を志した理由は?

A1. ARへの関心と人との縁

幼い頃から数多くのSF作品を見る
中で、科学に関心を持ちました。修士課
程に進学する前に放送していた拡張現
実感(AR)を題材にしたアニメに影響
を受けたことが、ARを研究テーマにし
たきっかけです。

修士課程ではARの研究室が東京工
業大学にはなかったため、その分野で
有名なクリンカー先生が在籍するミュ
ンヘン工科大学への交換留学を決意し、
先生にメールをしました。残念ながら返
信がなかったため、ポストドクの方に
改めてメールを送ったところ、それが
目に留まり留学も決まって無事ARの研
究ができました。修士課程修了後に一
度就職しましたが、2年後にその研究
室から誘いを受け、研究員として3年間
ドイツに留学して博士号を取得しました。

帰国後は国際会議で何度かお会いし
ていた杉本麻樹先生の推薦で特任助教
に就任しました。2017年にさきがけの「人

とインタラクションの未来」領域が始まる
など、巡り合わせの良さを感じています。
その後、母校の東京工業大学で自分の研
究室を持つチャンスにも恵まれました。

Q2. 現在の研究内容は?

A2. 視覚や認識できる世界を広げる

現在実用化されているARはスマート
フォンなどの画面を通して見るものが
多いですが、私はARメガネを装着する
ことで人間の視覚を拡張するという研
究に取り組んでいます。AR映像をより
リアルにする研究や、特殊なプロジェク
ターで普通のメガネに映像を投影する
研究、色覚特性のある方の補助など
のように人々の暮らしを助ける研究を
行ってきました。

コロナ禍においてオンラインのコ
ミュニケーションが増加する中で、人
や物事の外面的な価値の重要性が下
がってきたように思えます。ARを使え
ば人間の顔や声は技術で上書き可能
ですし、AR技術がさらに進歩すると現
実と

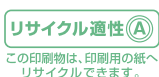
遜色のない世界をつくれるかもしれま
せん。今後はこれまでの研究を発展さ
せ、視覚から人が認識する世界全体に
研究対象を広げて、それを拡張する技
術の確立を目指していきたいです。

Q3. 研究者にとって大切なことは?

A3. 運とタイミングをつかむために種 をまく

研究成果は知ってもらうことが重要
です。しかし、コロナ禍で成果を伝え
にくい状況になってしまいました。です
から、アカデミアにおいて研究者自身
が広報活動を行うことの重要性がま
ず増したと考えています。

これまでの研究人生を振り返ると、
運とタイミングに恵まれたのは確か
ですが、そのための種をまくことはし
てきたように思います。自分が面白い
と感じたらまず試してみること、それ
を評価してくれる人との出会いを切
にすることが、充実した研究人生につ
ながるのではないのでしょうか。



JSTnews

August 2021

発行日/令和3年8月3日
編集発行/国立研究開発法人科学技術振興機構(JST)総務部広報課
〒102-8666 東京都千代田区四番町5-3サイエンスプラザ
電話/03-5214-8404 FAX/03-5214-8432
E-mail/jstnews@jst.go.jp JSTnews/https://www.jst.go.jp/pr/jst-news/



最新号・バックナンバー